

第626回

九州朝日放送番組審議会議事録

—— 2020年9月度 ——

- ◇ 開催日
2020年9月23日(水)
- ◇ 議題
＜ディスカッション＞
(テレビ朝日系列統一テーマ)
新型コロナウイルス報道とテレビの役割
- ◇ その他

九州朝日放送株式会社

第626回 番組審議会議事録

1. 開催年月日 2020年9月23日(水)午後15時55分～17時30分

2. 開催場所 九州朝日放送 7階A会議室

今回は「新型コロナウイルス」感染防止（三密回避）の観点から、十分にソーシャル・ディスタンスを確保するため通常より広い会議室にて開催した。

3. 委員の出席

委員総数 7名

出席委員数 6名

委員長	池田 勝
副委員長	戸田 康一郎
委員	山崎 靖
委員	石井 靖子
委員	守田 有理子
委員	赤木 由美

欠席委員数 1名（リポート代読）

放送事業者側出席者名

代表取締役社長	和 氣 靖
常務取締役	笹 栗 哲 朗
総合編成局長兼ラジオ局長	坂 井 剛
報道情報局長	柴 田 高 宏
報道情報局 解説委員長	臼 井 賢一郎

番組審議会事務局長兼視聴者・広報室長	石 橋 聡
番組審議会事務局（視聴者・広報室）	松 永 俊 郎

4. 議 題

- (1) ディスカッション (テレビ朝日系列統一テーマ)
「新型コロナウイルス報道とテレビの役割」について
- (2) 9月・10月 ラジオ・テレビ番組編成状況の報告
- (3) 8月 視聴者・聴取者応答状況の報告
- (4) その他

5. 議事の概要

委員の意見 (概要)

委員からは、

- テレビで出演者がソーシャル・ディスタンスを取るようになり、スタジオセットにアクリル板が設置されるようになると、視聴者はいよいよ本気で新型コロナウイルスに向き合わなければならないと思ったのではないか。テレビが率先して何をすべきか見せたと思う。
- 報道やテレビに求められるのは、綿密な取材や正しい情報を、精緻なデータあるいはエビデンスを明示しながら正確に伝えること。とりわけテレビはビジュアルで伝えることができるので、しっかりとした解説と正しい情報を伝えて欲しい。
- 「羽鳥慎一モーニングショー」の大型パネルを使った説明手法は専門的な解説を必要とする新型コロナウイルス報道において有効だ。一方、政権批判と相まって、イデオロギー的な対立を招き、本来議論されるべき本質的な問題が十分に報道されていなかったと思う。
- SNSなどで発信される無責任な情報や、差別・偏見につながりかねない情報が広がり、理不尽な形で経済活動や社会生活が行えなくなる企業や個人が出ている。だからこそ信用あるテレビには「正しい情報を分かりやすく伝える」という役割を果たしてもらいたい。
- 若年層でテレビ離れが進むとも言われるが、自宅でテレビに接する時間が増えた人も多かったのではないか。ネットやSNSの情報も元をたどるとニュースソースはテレビや新聞。新型コロナウイルス報道を通じて、テレビの価値に気づいた人もいたと思う。テレビの価値の向上につながることを期待している。
- テレビは正しい情報を迅速に伝える使命があるのに、専門家や医療関係者以外のタレントや芸能人がコメンテーターとして発言していることに違和感を覚えた。また、新型コロナウイルスの拡大画像をよく目にするが、視聴者に有益なのか疑問に感じている。
- 報道番組でもワイドショーでも、トップ項目が連日新型コロナウイルス関連であることに疲れを感じている。真の問題や課題をあぶり出し、それをより良い方向に導く示唆に富んだ報道、未来につながる報道をお願いしたい。
- 注意喚起が目的でも、視聴者からすれば強い表現、不安をあおる内容と感じる場面もある。例えば、減ることがない「累計者数」の上積みはマイナス面の上積みでしかなく、否定的な内容を誇張しているように感じた。
- マスクの着用を拒否した男性が緊急着陸した飛行機から降ろされたという報道は印象に残った。過熱する報道は一種の「弱い者いじめ」の印象を受けたし、テレビ報道により「同調圧力」が高められたという印象を受けている。速報性を求めるテレビ報道だけでは、当初、真相が見えてこなかった。

- メディアの姿勢が政府批判や自治体の首長批判など「批判ありき」の傾向が強かった気がする。単に批判という姿勢には違和感を覚えた。多面的に伝え、単なるセンセーショナルリズムではなく、一人ひとりを正しい方向に導く有益な情報提供をして欲しいと思う。
- コミュニティーが狭い人、社会的接点が少ない人はテレビからの情報に信頼を寄せる確率が高いのではないか。そうした人は自身の考えが消化不良になりがちなので、マイナス面を伝えたら別のプラス面も伝えるなどしてバランスを図る工夫が欲しい。
- 人出が減った街の様子を報道するだけでなく、みんなが自粛に協力しているからこそその風景であり、一人ひとりの頑張りを労う内容もあって良いのではないか。「もっとみんなで頑張ろう」という雰囲気を作るのもマスコミの役割ではないかと思う。

などの評価や提言を頂きました。

これらに対して、担当者からは、

- 公衆衛生の危機、社会の危機が幅広くかつ根深く進行する中、国民の「知る権利」に応えるテレビ報道の役割が増大したと考えている。政府や専門家の情報提供が日々上書きされる中、テレビ報道によって国民の「不安」をどう「安心」に持っていけるのか、そのための情報提供にどうするか心を砕いている。
- KBCでは地元日本感染症学会指導医の山口征啓先生がいらっしゃることを把握した。視聴者がもやもやすることを収斂してくださる山口先生にテレビの各レギュラー番組とラジオ番組も含め、数十回にわたって解説を頂いている。
- 未曾有の危機で分からないことだらけの中、報道の在り様、課題を突き付けられているというのも事実だ。日々、走りながら、現場で学びながら、その都度その都度手探りで答えを探しているような状況だ。
- 新型コロナウイルス報道は長期化している。KBCはラテ兼営局の強みを生かし、7月以降のラジオレギュラー番組において、過去に出演者やコメンテーターがどういうトーンで何を問題提起したかなどを検証している。これまでの自社の報道内容を検証し、今後の新型コロナウイルス報道に生かすことを目的としている。

などの説明をしました。